

第三百九十七回青葉会

令和元年五月二十三日(木) 井の頭公園吟行

集合 午前十時 吉祥寺駅前 「はな子像」前
句会 午後一時半〜四時半 御殿山コミュニケーションセンター会議室

〈参加者〉 今井紀久男 柿崎忠彦 ◎川口孤舟(選者) 山崎亜也 山内天牛
伊賀山そらお 大林猛 土谷堂哉 豊田ゆたか(スイス旅行中) 古田昇
宮内規雄 山田けい子 渡邊盛雄

《互選句》

四点 ◎ 見上ぐれば楓若葉は江戸小紋 天牛 (紀・忠・孤・亜)
(出席者全員が選んだ見事な句。下五の表現が素晴らしい)

三点 ◎ かんかん照り老頭児どちの句を詠みて 紀久男 (忠・亜・天)
ロートル
(上五が季語になるかどうか疑問)

二点 ◎ 井の頭うぐひを撫でて冷酒酌む 全 (忠・亜)
(毎年淡水水族館でかみつき亀や山椒魚を見て一息入れます)

◎ 師の病みて見舞も出来ぬ夏吟行 全 (忠・孤)
◎ 若葉光眩しきはな子悼む日に 忠彦 (紀・孤)
(27日が四回忌)

◎ 今年また新樹の中に句を探し 全 (孤・天)
緑蔭や肘水平に笛を吹く 孤舟 (亜・天)
空つぼのはな子の寝部屋風薫る 全 (忠・天)
◎ 虫干の苦学の父の原書かな 堂哉 (紀・孤)
◎ 風薫る飯盒とみに吹きこぼれ 全 (孤・亜)
◎ 青梅や肌膚(はだき)にそつと触れてみる 亜也 (孤・天)
◎ 途半ば暮れなむとしてえごの花 全 (紀・孤)

◎ 夏帽子忘れ利き酒六杯目 けい子 (忠・亜)
一年ぶりサンショウウオは死んだふり 天牛 (紀・忠)
◎ 碧眼のジョッキ翔(か)ける皐月かな 盛雄 (紀・孤)
花なくも新緑満ちる散策路 そらお (紀)

◎ 酒過し今夜待たるる蜺汁 猛 (亜)
鍛へたるウグイスの喉こだませり 全 (紀)
快癒してビールの美味き井の頭 忠彦 (紀)
新緑の水面へ櫂の雫かな 孤舟 (天)
片蔭を拾ひつ渡る弁天橋 全 (天)
蒼穹へ合掌を解く朴の花 全 (紀)
老鶯の声音艶あり明の空 ゆたか (紀)
夏告げる如揚羽の舞いて去る 全 (紀)
◎ 紅白の機織のごとく躑躅咲く 昇 (孤)
戦争のなき平成や花は葉に 全 (紀)
マーガレット郵便局に鉢二つ 規雄 (紀)
◎ 竿入れて萍動く魚信かな 亜也 (孤)
初蟬や思はぬ人に教へらる 全 (忠)

蔵めぐり葉末(はずえ)に赤きさくらんぼ
腹みせるカエルの仲間イモリ君
眸(め)に青葉天平奈良にホテル建つ
花桐や万葉文化今に生く
望郷の竹の子飯や道の駅

けい子(紀)
天牛(紀)
盛雄(紀)
全(紀)
全(忠)

●次回青葉会

六月二十七日(木) 午後一時半～四時半

文京区民センター会議室

▲当季雑詠各自五句 投句は二句

七月二十五日(木) 午後一時半～四時半

同右

以上 文責 紀久男



一、五月恒例の井の頭吟行。地元の亜也さんらわずか五人の参加で投句八名。こぢんまりとしてますが、皆さんベテラン揃いで初夏の快晴にも恵まれ、それなりにすつきりとした吟行となりました。

今年も幼稚園や小学低学年の遠足で賑わっておいりましたが、やはりはな子の空き家は淋しく後継の象が待たれます。

句会は亜也さんが進行役で、御覧のように天牛さんの風にそよぐ楓若葉を江戸小紋に見立てた句がトツプでした。小生持参の純吟「沢の鶴」と缶ビール、おつまみ等賞味しつつ、

(一) 眞希子さんからのFAX(万里子先生の近況等) (二) そらおさんの投句FAX(幼少時、井の頭近辺が遊び場だったこと、玉川上水の増水のおそろしさ等) (三) 規雄さんからのお手紙(退会意向) (四) 句集「モンプレジュール俳句集II」を回覧。そして山田けい子さんの娘さんのジャズライブチラシ(7月13日夜、赤坂Bフラット。「山田ゆきと椎名豊トリオ」と小生の「河東節開曲三百年祭の助六」をお配りした。

お元氣にご活躍の天牛さんへ九十歳のお誕生祝に俵屋の水羊羹「一枚流し」を贈り喜ばれましたことご報告します。

終了后、小池治さんのいきつけだった伊勢屋で軽く一杯飲(き)りました。

二 関係者近詠

露のたう卒寿の母の摘み上手 眞希子 たんぼぼの風大空を吹き渡る 規雄

初舞台への励ましと初音聞く 全 全 | 「NHK俳句」 六月号 宇多喜代子選

再婚の置土産とや君子蘭 全 全 手火花や母郷に残る数へ歌 盛雄

試算表組みで崩して春寒し 全 弘子 大甕の目高と目の合ふ佳き日かな 全

顔幅で笑ひし叔母の訃桜貝 全 手術後の医師の笑顔や楠若葉 健介

畦道の長きを浅春野辺送り 全 理不尽へ角怒らせよ蝸牛 全

守り継ぐ畠を焼く火へ仁王立ち 全 また転び女房呆れ鶉嘲笑 紀久男

剝がされし赤木に沁むる春の雨 全 毒々しと妻の毛嫌ふアマリリス 全

あれは然り近年一番の初音とぞ 全 恋多き「卯波」の女将冷酒呷る 全

佩刀の重きに男雛たふれたり 全 幕引のことを真顔でお中日 | 「きさらぎ」 5〜6月

鶯のやがて応へずなりにけり 全 全

―「森の座」 6月号

紫陽花や揺れてゐるのは僕なのさ 正明 睡蓮や細波立てる午後の雨 允章

君が去る紫陽花色のワンピース 全 水遣りの度に殖えをり花胡瓜 全

冷奴酒があつても無くつても 全 夕立あと街の灯映す潦(にわたずみ) 全

夏料理青い簀の子が目を醒ます 全 初デート鏝(つば)いと広き夏帽子 堂哉

西空の崩れたちまち大夕立 全 全

三 毎日新聞「俳句あるふあ」の創立編集者の清水潔さんが2002年春にマスコミ志望の学生

達と社会人との交流の場として結成した表現塾「江戸座」での毎月一回のウェブサイトの句会が2000回を迎えた記念の合同文芸集『江戸の風になる』を上梓(5月)され、御恵贈に与りました。粹で洒落のきいた「遊びの精神」溢れております。小生好みの句を抄出しました。

読みかけて昼寝の夢の人となる きよし 花道を駆け抜け愛しき勘三郎 チカ

日盛りに不機嫌な街立ちつくす 全 蕎麦手繰る粹を見せるや寄席噺 全

ひるがおや小顔に見せる昼化粧 全 熱爛が一番好きと母白寿 みや

ふるさとの訛りふつくら雪の駅 全 一望の海一閃の夏燕 一果

そのことは終わつた話蜜柑むく 全 海一枚割つて漢(おとこ)の泳ぎかな 全

大阪のおばちゃんもいる寒雀 全 全

美しく病む妻を撫で冬籠 全 全

四 七代目團十郎が江戸追放の折、世話になった南信州・飯田の旧家出身関島多佳子（明石在住）さんより頂いた「モンプレジュール俳句集Ⅱ」より小生好み抄出しました。

上方のまつたり台詞初芝居	入野和子	半玉の花簪に春の雨	多佳子
顔見世のことさら美味き棧敷酒	全	弾き終えて棹湿りたる大暑かな	全
回り盆鏡餅据ゑ文楽座	濱野勝海	顔見世やまづ仇討の幕のあき	全
天高く文楽巡業旅靴	全	森黒く雪原の果てプラハなる	全
雨音に勝る三味線男梅雨	全		

令和元年六月二十日

以上 紀久男記